

沼津の偉人 江原素六

皆さんは本市にゆかりのある偉人と聞くと誰を思い浮かべますか。禅僧・白隠慧鶴^{えかく}や歌人・若山牧水、作家・芹沢光治良など様々な人物がいますが、政治・教育・産業など多方面で活躍した江原素六は、明治から大正にかけて多大な功績を残し、本市の発展に大きく寄与した偉人の一人です。

素六は、江戸時代後期に幕臣の子として江戸に生まれ、幕臣として出世しました。幕末維新期の動乱をくぐり抜け、たどり着いた沼津を第二の故郷とし、地元住民のために生涯をかけて力を尽くしました。現在の沼津市があるのはこの偉人の功績が大きいといわれています。

今年は素六の生誕180周年・没後100周年の年です。皆さんに少しでも素六を身近に感じて頂けるように、今回の特集では改めてその功績等についてご紹介します。



驚くほど演説が上手く、博識

政治家として活躍していた素六の演説は「耳を傾けさせる」と定評があり、明治15年に乗蓮寺で行われた演説会では、そのあまりの巧みさに、当時政党的の党首で、東海遊説中だった板垣退助を感嘆させ、その後の遊説に同行することとなったほどでした。

また、幼い頃から勉強が好きで、各学校の校長や政治家になってからも、毎日英単語を20個覚えていたという話や、かなりの博識で、明治天皇の家庭教師候補に挙げられたこともあったという資料も残っています。その知識量や教師としての実力は日本全国から認められるものであったといえるのではないのでしょうか。

質素すぎる暮らしが

政治・教育・産業と多方面で活躍していましたが、その生活はとても質素なものでした。自宅では、古紙を重ね合わせた手製の座布団に座っていたといえます。また、表札は常に欠け、「江原素六」の文字が「江原素」までしか見えていなかったという話もあります。質素な生活の理由は事業で借金を抱えていたこともありましたが、なにより困っている人がいると見過ごせず、学費で窮した学生がいると匿名で送金していたことも大きな要因でした。そのため、どれだけ貧乏であろうと馬鹿にされるようなことはなく、常に周りから敬われていました。

素六の人物紹介



自宅での素六と妻・ぬい

生涯をかけて沼津のために尽くした素六はどのような人だったのでしょか。ここでは、素六の人物像について当時のエピソードを交えながらご紹介します。

沼津を愛し、沼津に愛された男

素六はとにかく働くことが好きな人でした。また、自分のことは常に後回しで、地域の発展のことばかり考えており、可能性のある事業には積極的に挑戦していました。

地域のために働くその姿勢は人々の心を打ち、素六が通りかかると老若男女問わずみんな頭を下げるほど、住民から敬われていたといえます。しかし、だからといってお高く留まることはなく、周りに気軽に声をかけ、遠くからでも自分から挨拶をしていたそうです。国会議員や中学校の校長として東京でも大いに活躍していた素六ですが、「私の家は沼津にあつて、東京には書物の置場があるだけです」と話し、最期まで沼津から住まいを移すことはありませんでした。